

# 活動センターだより

2009年度 第2号 (3月20日発行)

2009年度 修学院フォーラム「福祉」－福音信仰の〈場〉を拓く福祉－ 第4回

## 「墓場で生きる他なかった男の物語」

崩れ落ちた「人格」の思想を拾い集める(マルコ5, 1-10)

2009年8月8日(土) 13:30～17:30

講師：岡山 孝太郎 (京都基督教福祉会理事長)

4月に始められた本フォーラムも4回目を迎えた。今回も「福祉」の視点からの深い洞察に満ちた講師の語りかけに参加



者一人ひとりの心の琴線が激しく震えさせられた。今回は「墓場に生きる男の物語」を題材に社会福祉の究極のテーマである「和解」に迫った。関係喪失としての「死」は私たちを絶望の淵へと押しやる。孤独感と疎

外感に満ちる「墓場」(終焉の地)でイエスは慟哭の叫びに耳を傾け、未来を切り開き、希望を語る。この絶望の呻きは「和解の響き」へと転じていく。

墓場に生きる他なかった男、その名は「レギオン！(大勢という意)」である。その男(レギオン)は生きるための条件が成立しない「死者」の葬られる墓場で、「その他大勢」として排斥され拒絶された状況へと追いやられた人々を代表する。この深い断絶の只中でイエスは、この男に名を問い(関係性の創出)、この男と出会う(弱さの受容)。イエス・キリスト(神)がこの男の弱さを受けとめ、ご自身のものとした。この弱さは弱さに終わらず、聖なるものへと転化された。弱さこそがこの男の重要な生きる力の源となる。悪意に満ちた破壊の表象としての「レギオン」は、その名でありつ

づけながらもイエス・キリストとの出会いを通し、支援と再生の表象へと変化する。

講演後の「はなしあい」では参加者の具体的な現場からの疑問や思いが寄せられ、日常生活の只中で聖書の物語を味わう喜びの一端に触れる事となった。なかでも、現代社会における「レギオン」的状况を高齢者施設に入居しているご自身の家族に重ね合わせ、高齢者の希望に関する疑問等も投げられた。確かに、個々人の能力や技量は年齢が加わると共に衰え老いる。効率や能力がもてはやされる「強さ」の時代状況にあって、いわゆる効率の悪い事や能力が衰える事は「無意味」「無価値」との否定的な烙印を押され排除され葬り去られる。

しかし、今回の物語はそのような「葬りの場」で生きる他なかった男に焦点が当てられる。「男が名を問われた時、この男の中に風が通った」との講師の語りは新鮮であった。男の傍らに立ち、男の呻きを聴き、男の弱さを受け止める。そこに固定的な存在を超え、流動的な関係性



(いのちの息)が創出する。人との関わりを分断され自己の存在が無意味化される闇の只中に新たな関係性が創出し、その只中に生きる喜びが響きわたるのである。「人は人とのつながりがないと生きられない」との語りは、人が関わりの中でこそ一人の人間になっていくとの真理を明示しているのかもしれない。個々の存在ではなく互いの関係性の只中に、他者や自分自身を新たに見出していくことが希望を紡ぎ出すのかもしれない。

今日的状況下、「レギオンの物語」は逆風となって、真のいのちの意味と方向を鋭く問いかけてくる。会全体の中に爽やかな風が流れていた。25名の参加者(含む講師)は「はなしあい」との関係性を通し、一人ひとりが物語の新たなダイナミズムに巻き込まれていった。そして、それぞれに心の奥底の響きを携え散会する事が許された。

小崎 眞(同志社女子大学准教授)

《参加者アンケートから》

- ・人間の現実、人間のいのちの苦しみというのを福祉の中でこれほど深く学ぶことができたのは初めてでした。
- ・生きがいという事は、人と人との出会いを大切に。命のきずなを大切に。希望を持って生きられるように、福祉に立ち上がりたい。共に生きる喜びが大切。

## 2009年度 修学院フォーラム「福祉」－福音信仰の〈場〉を拓く福祉－ 第5回 「死の変貌を見詰めていた女の物語」

夜明けを告げる「先行」の思想を生きる(マルコ 16, 1-8)

2009年9月19日(土) 13:30～17:30

講師：岡山 孝太郎(京都基督教福祉会理事長)

かつて社会福祉はキリスト教精神によって先導された。しかし社会福祉における国や地方公共団体の役割が大きくなるにつれ、キリスト教社会福祉の独自性が、一般社会にも、社会福祉で働く人にも見え難くなった。そうした時代にあって、聖書は社会福祉のあり方に対して何を語るかを聞こうとしてこの5回に及ぶ連続プログラムが企画された。

講師はマルコによる福音書を辿りながら、社会的助けを必要としている人達および、その助けを自分の仕事として引き受けている人達の、絶望にも近い呻きを背後に聞きつつ、社会福祉における希望を取り次ごうとした。今回はその最終回である。

イエスを慕ってついてきた女達は、その師が十字架上で息果てるのをどう思うで見つめていたのか、3日の後どんな思いで墓を訪ねたのか、空の墓の前で主の復活が告げられるのをどんな思いで受け止めたのかを辿りつつ、福祉とは、

人間の歩みの悲しみや痛みに伴いしつつ、しかも絶望を越えて見えるかすかな希望を取り次ぐことである、と結んだ。

終わりによせられた参加者の感想の中に、次のような言葉があった。聖書から福祉の原点を学ぶことができた。福祉というのが人間として生きるむなしさに向き合いつつ、復活の希望に生きることであることを学べた。今回のシリーズを通して、社会福祉で働く私はとても勇気づけられた。このセミナーをぜひ続けて頂きたい。

小久保 正(中部大学生命健康科学部教授)



《参加者アンケートから》

- ・どうしても神学と福祉の関係についてもっと勉強するべきだと考えさせた時間でした。
- ・福祉というものが、人間が生活しているむなしさ、みじめさを見つめることということを学びました。
- ・今回のシリーズにおいて、社会福祉で働く私にとって、とても勇気づけられるものとなり、感謝しています。

## 2009年度 第4回 開発教育セミナー

### 「水俣フィールドスタディ～公害の原点を訪ねて」

2009年9月20日（日）13:20～9月22日（火）14:40

講師：坂西 卓郎（元(財)水俣病センター相思社職員）

今回のセミナーでは、熊本県水俣市を訪れ、水俣病センター相思社元職員の坂西卓郎さんを講師としてフィールドスタディを行った。水俣病は公害の原点とも言われ、1956年に発生が確認されてから53年経った今なお、患者認定の訴訟が続いている。

1日目は、水俣病歴史考証館で、水俣病発生以前の水俣の自然や地理、人々のくらしの様子、チッソとのつながり、発生・確認後の患者への差別や行政の対応、患者認定のへ闘いなどについての多くの資料を見学した。また、親水護岸（水俣湾埋立地）見学、チッソ周辺見学の後、2007年3月に2266番目の水俣病患者として8年ぶりに認定された緒方正美さんのお話を聞いた。緒方さんは、幼少時に毛髪から水銀が検出されていたにも関わらず、1995年の政治解決では否認定となり、1997年からの10年間、一人で認定へ向けての闘いを続けられた。お話の中で「行政も一人ひとりの人間が作り上げているものであり人間を信じぬくこと、いつも正直な気持ちで真実を伝えていくことを大切にしてきた」ということが強く印象に残った。緒方さんや坂西さん、相思社の職員の方々を囲んでの夕食時には、「安全宣言が出されているにも関わらず、未だに『水俣の魚を食べても大丈夫なのですか。』と聞かれることがある」との話聞き、水俣病についての事実がまだまだ知らされていないこと、事実を知らないことから生まれる他地域に住む私たちの思い込みや偏見を感じさせられた。

2日目の午前中には、小学校教員・濱口尚子さんから地元の学校での水俣病学習についてのお話を聞いた。「水俣出身」ということで差別されたことに関して何も言い返すことができなかつた水俣の子どもたち

が、真実を知ることからふるさとを誇りに思えるようになってほしいとの思いが広がってきていることを知った。午後から、3日目午前中にかけては場所を移動し、水俣市役所職員・富吉正一郎さんの案内で「新しい水俣市」としての取り組みである、大川村丸ごと生活博物館体験、地元の方との交流を行った。

3日目は、胎児性水俣病患者の方が集う共同作業所「ほっとはうす」を訪れ、4人の患者の方の生い立ちについてのお話を聞いたり、しおり作り体験交流を行ったりした。施設長・加藤タケ子さんのお話の中では、「その時代に生きている一番困難な人に対する『おびやかし』が水俣病の教訓だ」ということが印象に残った。

この3日間を通して、当事者の方々と接し、直接お話を聞き、身体的な苦しみ以外に地域の中での差別や偏見が人々をより一層苦しめてきた事実を知った。また、「『水俣から来た』と言えなかった」事実から再生し、地域の資源を活かした町づくりを、現地の方とのふれあいを通して知ることができた。

参加者の大半は、実際に水俣を訪れたのは初めてだったが、「互いのしんどさや違いを理解しようとする想像力を持って人と接することができたら、多くの問題の解決を少しは進めていけるのではないか。」

「訪問や人々との出会いから、過去の現実から未来へと自分自身を考えることができた。」などの感想が寄せられている。今回のプログラムを通して、それぞれが自分自身の生き方について考えるきっかけになることと思われる。

友前 尚子(中丹市立園部第二小学校教諭)

2009年度 修学院フォーラム「老い」ーこの美しい約束のいのちに向かってー 第2回  
「何もできなくなって、なおも存在する意味とは何か」

コルサコフ症候群について

2009年9月26日（土）9:00～13:00

講師：藤 縄 昭

（京都大学名誉教授、国立精神保健研究所名誉所長、総合心療センターひなが名誉院長）

当初は、二日間の計画で、神学的なアプローチも計画していたが参加者が少ないため中止し、病理からのアプローチのみのプログラムとなった（参考までに、田部郁彦牧師とは、新約聖書における人間論、永遠の命、からだの復活と言われている信仰の内実と肉体の死、教義学からの命と死の理解、ユンゲルの「死」などを参考にして・・・等々について、話合っ準備していただいていた）。本フォーラムの目的は、08年度と同様に、老いに伴う問い、「何もできなくなってもなお存在する意味はなにか」であるが、今回はそれを病理の面から見ていこうとしたものである。



講師は藤縄昭氏（京都大学名誉教授・国立精神保健研究所名誉所長・総合診療センターひなが名誉院長）で、主題は、「コルサコフ症候群について」であった。健忘症

候群と考えてよいと思うが、見当識障害、記銘力障害、作話障害を特徴的な症状として持っている（コルサコフ症候群については、藤縄昭著『精神病理研究』（弘文堂）8頁、共訳『精神障害の分類と診断の手引き』（医学書院）6頁、藤縄昭編『心のソムリエ』（弘文堂）251頁など参照されたい）。この三つの症状について説明された。

「はなしあい」では、三つの症状について取り

あげられたが、特に、その場や、聴聞者（医師やカウンセラー）に合わせた、一見作り話のように見られる「作話」という行為、そこでの当事者の存在理解等について話し合われた。健忘と対面者との関係（ある人を覚えていて、ある人を忘れていくこと）も、自他の間での認識、あるいは間主観などから、生命の継承の意義について話し合う契機となる言及もあった。

また、講演者が、高齢の憧憬である「悠々自適」という状態の話しから、退職後に起きる「うつ症状」についても話し合われた。本テーマにかかわる話し合いであった。生きることの目標、他者との関連した生、希望の在処について言及された。たまたま司会者が牧師であったのでキリスト教信仰からはどのようなことが言えるのだろうか、という問いが出された。旧約聖書の人間論における老いの意義（生命の連鎖の中にある生のリアリティ、神の祝福としての老いの意味）、イエス・キリストの十字架の死からの復活の希望に触れるとともに、J.H.ハーヴェイの喪失心理学入門（和田実・松田匡裕編訳『喪失体験とトラウマ』（北大路書房））の例や、思想（09年3月号）の木村敏論文の引用を通して、老いを負としたスティグマ化（ここでは恥辱・劣等感を与えるものの意）に抗していくこと、さらには喪失によって見えてくる、あるいは病理の中に隠されていた、豊かな生命の営みを見いだしていくことが、これから生きていく者たちへの希望の提示となることなどを話した。

活発な話し合いが続き、司会者が2回の老いのテーマについて準備したペーパーについて発題する時間がなかった。まとめの意味で、ここにそれを記したい。

昨年から引き継いだ本フォーラムの主題、「何もできなくなって、なおも存在する意味とは何か」は、元気な人間の問いでなく、老いと死に直面しての問いであるだけに重要な問いである。これは、本人の問いであるだけでなく、わたし

たちの負うべき問いである。近年、生の意味を問うことができなくなってきた。これはマックスウェーバーが預言した資本主義のもたらすものであり、価値の一元化、また使い捨て経済・文化がもたらした、人間の生の無化による。(ただし、私は、このような社会的な表現よりは、もう少し別な方向からの問いに興味を持っている。木村敏の『思想』(2009/3)「クリーゼの病理」において、ヴィクトア・フォン・ヴァイツゼカーの『ゲシュタルトクライス』からの引用で、「主体がクリーゼにおいて消滅の危機に瀕したときにこそ、われわれは始めて主体に気付く。……主体とは確実な所有物ではなく、それを所有するためには絶えず獲得し続けなければならない……」と書いているような生の回復を思考しなければならないし、そうでなければならない。人は社会的な生物かもしれないが、それに支配された生は生ではない。木村敏も書いているが、超越的な生から個の生が生を受けている、というような生(フランクは『生きる意味を求めて』p67で「……この自己超越性という特質を人が生き抜かない限り、実存することはできなくなるのである」と語っているように)。わたしはキリスト者として、それが信仰の生であるし、信仰という事柄の生命性であり真実性だと考えている。関西セミナーハウスがより一層思索していくべき分野だと考えている。

初めの「何もできなくなって、なおも存在する意味とは何か」に戻るが、アウシュビッツの経験を持つビーゼルは、死んでいった両親や妹あるいは祖父母たちが「生きていいんだよ」と呼びかける赦しの言葉を聞き取って歩み出す(『夜・夜明け・昼』みすず書房)。レピナスは他者の死に直面して自己の生の疚しさを覚えるという形で、自己をとらえていく。そういう意味で、「何もできなくなって、なおも存在する意味とは何か」という問い(他者からの問い)は、わたしたちの生を問う問いであり、これを手放してはならない。

先に挙げた社会学的な視点は、綱領的な言い方で、生を無化されたと思われる者も必ずしも被害者ではない。自らの加害者でもある。「老い」を負としてとらえる要素のステレオタイプ化とそのスティグマ化を担ってきたことを思うと、高齢者がそれに立ち向かうことが後に残る者たちへの生命的な貢献となる(参:J.H.ハーヴェイ『喪失体験とトラウマ』和田・増田編訳、北大路書房)。

今回病理学的な面を学んだが、病理的な現

象は、はたして負として評価すべきものであろうか。また健忘という症状も負と評価すべきものであろうか。作話障害にしてもせん妄、あるいは既視感・既体験感といった病理と呼ばれる事柄においても、いわゆる「健常」においては抑圧され、見えていない生の輝きのような面を秘めてはいないだろうか。神の秘義に触れるように、生の秘義に触れていくあり方が、信仰の問いではないであろうか。

先に、価値の一元化だとか使い捨て経済の弊害、といったことに触れたが、それだけではなく、経済、文化、医療や介護体制、医学的な知見、家族、信仰や人間性といった面をトータルに見ていくことが欠かせない。神学も、K.バルトが語るように、神の啓示がもたらす危機とともに、わたしたちの置かれた状況がもたらす危機の中で(スキラとカリブデイスのような)……まさに出口なき状況の中で、「……大いなる危急と大いなる救いへの希望から絞り出された叫び……」(『キリスト教宣教の危急と約束』新教・著作集1 p140)を語りだしていくしかないし、それが希望の言葉とされていくことであろう。安易な道はない。だからこそ命の尊厳の道は希望に満ちているのである。

関西セミナーハウスがこのような事柄にかかわる根源には、前述的なキリスト教の信仰の問題がある。特に旧約聖書の人間論が示唆することは大きい。特に高齢者の救済史における意味(これは過去の問題だけではない)、また創造物語において創造の完成が神ですら手を完全に止めた休息であることの意義は、技術世界に対する超越的な否定の声が鳴り響いている(絶対的否定の中で肯定を聞き取るかどうか……優れて旧約的)。さらに決定的なことは、「何もできなくなって、なおも存在する意味とは何か」は、十字架のキリストを思う限り、十字架のキリストをわたしたちの生の疚しき、わたしたちの生の永遠の問いであることを思うとき——全く同時に祝福なのであるが、その問いは本質的な問いであり続ける。生はどこから来るのか、生とは何であるのか、そのことを喜ばしく聞き取っていくことが「老い」に向き合う共同の作業として待たれることではないか。思考しないことと無関心こそ、生の死であることをわたしたちはこの時代の中で銘記すべきであろう。(本テーマの取り組むべき諸課題については第1回報告に記した)。

鈴木 和哉(日本キリスト教会吉田教会牧師)

《参加者アンケートから》

- ・記憶と自己の関係を改めて考え直す契機となりました。
- ・話し合いの雰囲気を感じとりながら、今、必要とすることをお話し下さったことに感謝します。
- ・老後についての生き方を参加者を加えての意見が伺えた。

2009年度 修学院フォーラム「生命」－iPS細胞の時代におけるキリスト教の生命倫理－

## 第1回 「キリスト教とiPS研究」

2009年10月9日（金）18:00～10月10日 15:00

講師：戸口田 淳也（京都大学 i P S 細胞研究センター副センター長）

シュペネマン クラウス（同志社大学名誉教授）

2年前京都大学山中伸弥教授は、遺伝子操作によれば、どの年齢の人の細胞からも、授精卵のように様々な細胞に変化し得る細胞を作ることができることを示した。このようにして作られた多能性の細胞がiPS細胞である。この細胞を用いれば、これまで不可能であった様々な生命操作が可能になる。この技術の社会に与える影響は、核分裂技術に匹敵する。こうした新しい技術を社会の中にどう位置付けるかは、その萌芽の時代にしっかり



議論しておかなければならない。キリスト教は、この技術の方向付けにどのような指針を与え得るかを考えようというのが、この4回に亘るプログラムの趣旨である。

今回はその第1回として、iPS細胞研究と医療応用の実像を当事者から正確に学び、一方でこの種の技

術を見るキリスト教生命倫理の視点をしっかり押さえておくことを意図した。

前者のテーマの講師には、京都大学iPS細胞研究センター副センター長・教授の戸口田淳也さんを招き、後者のテーマの講師には、同志社大学名誉教授シュペネマン・クラウスさん



を招いた。戸口田さんは、骨腫瘍学を専門とする整形外科医であり、シュペネマンさんは、社会倫理学を専門とする先生である。ご両人とも、わかりやすく、総合的に基本的問題点を示して後の議論を導いて下さった。

参加者は、牧師、医師、学生など15名で多くなかったが、参加者と講師の間で、極めて密度の濃い議論が時間いっぱい展開され、次回以後に議論すべき多くの課題を残した。

今後の展開が楽しみである。

小久保 正 (中部大学生命健康科学部教授)

《参加者アンケートから》

- ・先端医療現場の状況を直接教えられたこと。
- ・戸口田先生の講演は、専門的であったが、理解できました。報道された知識ばかりみて知ったのは、たいへん誤解もあったことが分かった。キリスト者として、iPS問題を結論づけることはできないが、方向づけは、ぼんやりとわかったような気がしました。

「『たぶんかきょうせい』と「外国人労働者」  
～これからの「多文化」社会にほんのあり方を考えよう」

2009年10月31日（土）16:00～11月1日（日）12:00

講師：鈴木 健（カラカサン～移住女性のためのエンパワメントセンター）

世界には2億人以上の移住者と2,3千万人の非正規移住者がおり、アメリカで7,8百万、日本には13万人が暮らしているといわれています。今、日本の結婚の18組に1組が国際結婚で、年35,000人の「ダブル」の子どもが生まれているそうです。しかし川崎市の母子家庭の10%が生活保護受給者で、そのほとんどがフィリピン人であることから、彼女たちが幾重もの偏見と困窮の中にあることがうかがえます。

「カラカサン」とはタガログ語で力という意味で、フィリピンからの移住女性を支援するNGOです。唯一の男性スタッフである鈴木健さんは、フィリピン女性とペアになって家庭訪問をし、DVや子育てに悩む家族とおつきあいをしてきました。最初のワーク「わたしのプロフィール」



ル」では、身近な外国人を他の参加者に紹介するものでしたが、意外にその人を知らないことに気づかされました。次の「フィリピンから来たジョシーさん」では、母国に子どもを残したまま出稼ぎに来て日本人と結婚し、3人の子どもを持ったものの夫からの暴力に耐えきれず

離婚を決意した女性が、どのような仕事と住まいを選んで暮らしていくかを想像しました。非常によくあるケースを通して、外国人の女性が1人で子どもを育てていくことの困難さを痛切に感じました。

セッション2では、昨年から経済連携協定(EPA)に基づいてインドネシア、フィリピンから来日した看護師・介護士候補者の体験と思いを知るスゴロクをしました。鈴木さんは、最初から国家試験合格を期待していないローテーション労働力とみなしているのではと話され、日本人の外国人労働者受け入れを以下に例えました。

- ・フロントドア（正面玄関）～専門職の受け入れ＝高度人材獲得
- ・バックドア（裏口）～バブル景気の労働者需要に応えるため、オーバーステイの人々も黙認
- ・サイドドア（勝手口）～日系人や研修生の受け入れ＝循環移民

セッション3では、移住労働者と母国にいる家族、その人を使う社長、一般市民と日本政府の役でロールプレイをしました。多くの事例に通じた鈴木さんが進めるワークはオープンで、新鮮なおもしろさがありました。交流会から多文化共生社会についての議論があり、外国人の出入国だけでなく、彼らが滞在することと向き合った地域社会の形成が必要だと実感しました。

金山 顕子（京都府立桃山高等学校教諭）



第2回 「キリスト教における生と死の概念」

2009年11月14日（土） 13:30～17:30

講師：白方 誠彌（前日本バプテスト病院院長）

岡山 孝太郎（京都基督教福祉会理事長）

iPS細胞の作成に象徴されるように、生物学が急速な発展をとげている今日、キリスト教はいのちをどうみるかをあらためて問うのが、このプログラムの趣旨である。4回に亘ってこの問題を考える。毎回医師と神学者の両者から発題を受け、参加者が自由にはなしあうのがこのプログラムの特徴である。第1回のテーマは、iPS細胞とは何かであった。今回は第2回で生と死がテーマである。

最初に医師の白方さんが「脳死と臓器移植」をテーマとし、なぜ今これが問題なのか、どこが問題なのか、諸外国ではこの問題をどう扱っているのかを紹介し、医学的には脳死は既に生存不能を示す状態であり、脳死を人の死と定義づけても何ら問題はない、と述べた。



ついで岡山さんが「キリスト教における生と死の概念」をテーマとし、聖書においては「消滅」（いのちの終わり）が同時に「充実」（いのちの始まり）であり、断絶の契機を生の秘義とする新しい生き方は、イエス・キリストの死からの復活の力を現実の生の只中に映し出す終末論的生き方に

おいて具体化すると述べた。これに基づき、iPS細胞研究は苦悩からの開放と救済を求めるキリスト教生命倫理の立場からも支援されねばならないとしつつ、iPS細胞研究を含む再生医療が最終的には不老不死を目指し、「死の追放」を究極の目標とするなら、それは深刻な生の崩壊となり、再生医療そのものの根底が崩れ落ちると警告した。さらに、クローン人間の作製を求める動機の背後には、自己拡大と自己保存の欲望が隠されており、それは再生医療の変質を生み、人間の不幸と社会の崩壊をもたらす。尊厳ある共生への責任を問うキリスト教倫理は、クローン人間の作製を容認しえない、とした。



参加者は、脳神経外科医、神経内科医、産科医、基礎生物学者、看護師、牧師から主婦まで多岐にわたった。はなしあいでは、脳死、臓器移植、植物状態、リビングウイル、治療停止、尊厳死、安楽死、復活、永遠の命、などを巡って様々な意見が交わされ、多くの議論を次回に残した。

小久保 正（中部大学教授）

《参加者アンケートから》

- ・「生と死」の問題を、医師の方から医学的な見地を、牧師にキリスト教の面からとあわせて聞くことができたこと。
- ・帰ってから、家族のものや友達と話しあい、ギロンがひろまりました。人間の本質的な問題を科学の進歩と信仰の面から、とらえるこの様なセミナーをもっとつづけてほしいと思いました。

「“公正な”貿易ってなんだろう？

～フェアトレード・チョコレートをとどる旅～

2009年12月12日（土）16:00～13日（日）12:00

講師：鈴木 紀（国立民族学博物館准教授）

クリスマスやバレンタインデーを彩るチョコレート。この原料となるカカオは紀元前から中南米で栽培されてきましたが、食べるチョコレートが生まれるのは19世紀になってからで、産業革命を通じて大量生産される身近な食べ物となりました。今回は、このチョコレートを題材に、カカオの生産者と私たちのよりフェアな関係づくりを考えようと、開発人類学の立場からフェアトレードの思想と実践について研究を行っている鈴木紀先生を講師に迎えました。



セッション1では、クイズを通して、チョコレートの歴史・生産工程・生産地や消費地などについて学習したあと、DVD「チョコレートの真実」（ACE教材）を視聴し、カカオ生産と児童労働をどのように考えたらいいのか、またカカオ農園の形態や規模、カカオの伝播したルートや時期、市販のチョコレートの価格の決めり方まで多岐にわたる感想や疑問点を出し合いました。

セッション2では、フェアトレード商品を個別に認証するFLO (Fairtrade Labelling Organizations International) マークの認知度でグループ分けしたあと、フェアトレードの「フェア」とはどんなことをさすのかをグループごとにブレインストーミングしました。その後の鈴木先生の講義では、日本で販売されているフェアトレードチョコレートの分類を通して、FLOやWFTO (the World Fair Trade Organization) や独自の基準で行うフェアトレードについても一定の理解ができました。さらに、鈴木先生のフィールドである

メキシコ、ドミニカ共和国、エクアドル、ベリーズなど中南米の国々のカカオ生産者組合や、欧米の企業やNGOの活動など、現地調査の成果を報告していただき、これまで見えなかったフェアトレードチョコレートに関わる現場を知る貴重な機会となりました。

セッション3では、フェアトレードを批判的にみて、どんな疑問点が出てくるかをグループごとに出し合いました。これらに鈴木先生に丁寧に答えていただいたことで、フェアトレードのさらなる可能性について探ることができ、その上で、今後、自分はフェアトレードとどのように関わっていくか、また最後には、フェアトレードチョコレートを誰かに送る時に添えるメッセージを、それぞれが考え発表し合いました。

消費者として、現在進行形で発展している「フェアトレード」というしくみのプラス面もマ



イナス面も、もっとよく知る努力を続ける必要を感じました。また「フェアトレード」を教材化する

ためには、何に対してこのような運動があるのか、何を狙っているのかをしっかりと押さえておきたいと思いました。

昨年のフェアトレードコーヒーを題材に取り上げた回に引き続き、講師の先生の計らいで、炒ったカカオ豆を味わったり、メキシコで飲まれているタスカラテやテーブルチョコレートの試飲も参加者全員で楽しみました。 織田 雪江（同志社中学校教諭）

《参加者アンケートから》

- ・ チョコレートについて、フェアトレードという面から見る機会になりました。世界とのつながり、チョコレートのむこうの生産者のこと、鈴木先生のおはなしで、気付きの場になりました。
- ・ 毎日に暮らして、流れてしまうことを立ちどまって考えるチャンスを頂きました。

2009年度 修学院フォーラム「生命」 — iPS細胞の時代におけるキリスト教の生命倫理 —

### 第3回 「キリスト教における健康と病の概念」

2010年1月9日（土） 13:30～17:30

講師：中島 健二（京都府立医科大学名誉教授）

中村 信博（同志社女子大学教授）

iPS細胞の作製で代表される生命科学の進展の急速な現代において、いのちをどうとらえるかをキリスト教の視点からあらためて考えるのが、この一連のプログラムの趣旨である。今回はその3回目、健康と病がテーマである。今回も医師と神学の専門家の双方から発題を受け、それを基に参加者が自由に語り合った。

最初に中島さんが、私達は健康と病をどう捉えてきたかを、古代から現代に至るまで歴史的に社会や教会との関係において



説明した。古代においては健康と疾病の区別がなかったが、古代においても現在私達が様々な名前によぶ病気があった。そこで、これらの病を負う人をケアする様々な施設が作られ、キリスト教会はそのケアに熱心であった。しかし、身体の科学的理解が進み、個々の病気の原因が明らかにされ、その治療方法に物理的方法が取り入れられてくると、その方針が教会と対立することも生じた。現代では、様々な物理

的方法に加えて生命操作も治療に加わり、医療とは何かが改めて問われるようになっている。

続いて中村さんは、病を生命力の低下し挫折した状態であると定義し、その病からの癒しを聖書はどう扱っているかを、サウルの病を堅琴によって癒したダビデの物語を手掛かりに説明した。この癒し物語は旧約時代の礼拝共同体において伝承され、ダビデからイエスに引き継がれ、信仰共同体の問題にと拡げられた。それは、死が単なる個人レベルの喪失ではなく、超越的次元への通過点として考慮されるべきことを強く示唆している。



これらの講演の後、参加者は病、死、ターミナルケアの可能性などにつき、それぞれの思いを述べ、講演者もそのはなしあいに参加した。ただし、その議論はiPS細胞の時代を迎えての新しい生命観にまでは至らなかった。参加者は、医師、主婦、牧師など25名であった。

小久保 正（中部大学教授）

《参加者アンケートから》

- ・ 中島先生の医学の歴史をキリスト教との関係が明らかにされたこと。
- ・ 中村先生のレジュメの最後に「死に至らないいのちについては語ることはできない。」「からだは、さなぎ、即ち殻で、脱ぎ捨てた後に魂が残る。」この二点が、しっかりと気持ちに添った様に感じました。

2009年度 お茶こころえの会

## 「ろうそくの光の中で、お茶一服」

2010年2月19日（金）17:30～18:30



夕暮れ時から、ろうそくだけのあかりで、ゆっくりお抹茶一服はいかがですか。

夜咄（よばなし）の茶事の雰囲気は少しだけ味わってみてください。

との呼びかけで、今回は清心庵を茶席に、一席8名として、参加を募った。

夜の長い冬の間に行われる「夜咄（よばなし）」の茶事は、周りが暗いのが好まれる。明りをろうそくや行灯のみとするため、暗くないと効果が半減してしまうからである。電灯が行き渡り、夜も明るい現代には、闇や静けさが少ない。その中で、外灯を消せば、静寂な闇に沈む清心庵は、夜咄に適している。その雰囲気を経験してみたい。



席入りは、日の光の残る中で、夕焼けから、刻々と夜の闇に移っていく光の変化を感じるのに良い時間帯であった。冷え込む中、茶室に招き入れられると、待合で温かい甘酒の接待を受け、一息ついてから、茶室へと進む。日が暮れると、周りの闇が、

ろうそくの灯で際立ち、静けさが、参加者の気持ちを寄り添わせる。「夜咄」のしつらえは、日常と切り離された異空間のような茶室の雰囲気、昼間に増して堪能していただくことができる。参加者は5名と少なかったが、いずれも感想を述べたり、積極的に質問したりして、会話が弾み、文字通り「咄し」を楽しみひと時ともなった。

たとえば、ろうそくの光によって生み出される影が、茶室の壁に山の稜線のように現れているのを見つけて、それが茶室の制作者の意図だったかどうかなどを想像して楽しんだ。また、冷え込みの厳しい夜の外気と障子一枚だけの隔てにもかかわらず、炉の炭火によって、茶室内は充分に暖かく、そんなところから、昔の人の暮らしぶりに思いを馳せたりもした。

終了後、障子を開けると、池に行灯の光がゆらめき、澄んだ空気に、星々が印象的に光る中、参加者は帰路についた。

お茶室のプログラムは、次年度は、キリスト教とのつながりなども考える、「お茶とキリスト教研究会」というシリーズを持つことになった。ご注目いただければ幸いです。

清心庵は、季節を楽しませてくれる茶室である。ぜひ、四季折々の体験をお勧めしたい。現在、呈茶は、予約制をとっているのので、関西セミナーハウスにお越しの節は、一度気軽に電話などで尋ねてみていただきたい。



報告：事務局

## 2010年度 4～7月

### 主催・共催プログラム予定

会場:特に記載のないものは、関西セミナーハウス

#### ■第1回 お茶とキリスト教研究会

「お茶を楽しみながら、聖書のみ言を静聴し、お茶とキリスト教の歴史的なかかわりについて学ぶ会」

日時：4月2日(金) 13:30～17:00

参加費：2,000円(抹茶込み)

#### ■第1回神学生交流会

日時：5月8日(土)13:00～16:00

参加費：300円

#### ■修学院フォーラム「福祉と聖書のこころ」

第1回「福祉の原点—この究め難い弱さの秘義」(マルコ1,40-45)

講師:岡山孝太郎(日本キリスト教社会福祉学会副会長)

日時:5月14日(金)18:00～15日(土)13:00

参加費:12,500円(学生10,000円)(1泊3食込)

#### ■第1回 開発教育セミナー

「開発教育入門セミナー」

場所:京都市国際交流会館(左京区蹴上)

日時:5月23日(日)10:00～16:30

参加費:無料

#### ■修学院フォーラム「いのちを考える」

第1回「いのちの多様性」

講師:平田 義(愛隣デイサービスセンター所長)

日時:5月29日(土)13:30～17:30

参加費:2,000円(学生500円)

#### ■第2回 開発教育セミナー

「一緒に考えよう私たちの未来～身近なところからはじめる国際協力～」

講師:藤野達也(PHD協会総主事代行)

日時:6月19日(土)16:00～20日(日)12:00

参加費:10,500円(1泊2食込)

#### ■修学院フォーラム「福祉と聖書のこころ」

第2回「いのちのひこばえ—捨てられた切り株の秘義」(マルコ2,13-17)

講師:岡山孝太郎(日本キリスト教社会福祉学会副会長)

日時:7月10日(土)13:30～17:00

参加費:2,000円(学生500円)

#### ■修学院フォーラム「日本はどこへ行くか」

第1回「正義・平和・被造物の保全と教会の責任」(仮)

講師:西原廉太(立教大学文学部教授)

日時:7月17日(土)13:30～21:00

参加費:未定

#### ■第3回 開発教育セミナー

「ファシリテーターのためのスキルアップ講座～教育・市民活動・国際協力の現場で求められるもの～」

講師:中田豊一(参加型開発研究所所長)

日時:7月24日(土)16:00～25日(日)12:00

参加費:10,500円(1泊2食込)

~~~~ 予告 ~~~~

#### ■修学院フォーラム「日本はどこへ行くか」

第2回「日本におけるキリスト教の可能性」(仮)

講師:佐藤 優(文筆家)

日時:8月28日(土)

第3回「ポスト資本主義の行方」(仮)

講師:浜 矩子(同志社大学大学院ビジネス研究科教授)

日時:10月2日(土)

桜の頃となりました。

多くのお支えにより、おかげさまで1年めを何とか大過なく終えることができました。ただし、「活動センターだより」は、今年度は2度しか発行することができませんでしたので、今号は、多ページになりました。新年度は、継続プログラムに加えて、新しい取り組みも企画しております。一層のご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。また、ご参加くださる皆様とお会いできるのを楽しみにお待ちしております。(か)

発行人：小久保正(関西セミナーハウス活動センター運営委員長)

発行所：(財)日本クリスチャンアカデミー 関西セミナーハウス活動センター

〒606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町23 電話：075-711-2115 FAX：075-701-5256

E-メール：office@academy-kansai.org ホームページ：http://www.academy-kansai.org/